

バレーボールにおけるルール改正に伴う戦術の変化 についての研究

著者	吉田 康伸
出版者	法政大学体育・スポーツ研究センター
雑誌名	法政大学体育・スポーツ研究センター紀要 = The Research of Physical Education and Sports, Hosei University
巻	21
ページ	23-26
発行年	2003-03-31
URL	http://doi.org/10.15002/00005064

バレーボールにおけるルール改正に伴う戦術の変化についての研究

The research for change of tactics follow revision rule on volleyball

吉田 康伸 (法政大学)
Yasunobu YOSHIDA

Key word (キーワード)

Volleyball (バレーボール), Revision rule (ルール改正), Tactics (戦術)

1. はじめに

近年各競技において競技力の強化を図ると同時に、マスメディアを意識した方策が様々に行われるようになってきた。その1つに試合時間の短縮などを目的としたルール改正が挙げられるが、特にバレーボールにおいてはラリーポイントシステムやリベロ制の導入、カラーボールの使用など、他の競技と比較しても目まぐるしくルール改正が行われている。

特に近年の改正は完全にマスメディアを意識したもので、各チームの現場レベルではその対応に追われているところが多い。

そこでかつて全日本女子チームが金メダル、男子チームが銅メダル(8年後には金メダル)を獲得した東京オリンピック(1964年)以降のルール改正の歴史を振り返りながら、何故その時期にルール改正が行われ、またそれによってどのような戦術が変化していったのかを考察し、今後考えられるルール改正についても予想をしていくことにした。

2. ルール改正の歴史及び戦術の変化

バレーボール(6人制)の歴史の中で戦術面は身体能力の違いもあり、常に男子の方が先行していたことから、男子を中心追っていくことにする。

1964年の東京オリンピックにおいてスピードとコンビネーションのバレーボールを展開した日本は、女子(後に東洋の魔女と呼ばれる)が金メダルを獲得、男子は銅メダルを獲得したが、この大会から4年に1度(オリンピック期間中)の総会においてルールの改正が行われるようになった。

その中で戦術の大きな変化をもたらしたと思われるルール改正をピックアップし、その変化した戦術について考察することにした。

(1) 1964年東京オリンピック(総会)におけるルール改正

- ①「ブロッキングの際のオーバーネットは反則ではなくなり、またブロックに参加したどのプレーヤーも、ブロック後

のボールに続いて再び触れることが出来る」

このルール改正によりブロッキングがより攻撃的な要素を持つようになり、高さとパワーを特徴とするチーム(当時はソ連や東ドイツなど)に有利なものになった。

その中で東ドイツが新しい戦術として、最強のブロッカーをセンターに置く「センターブロッカーシステム」を開発した。従来は両サイドからの攻撃が主要なものであったためその両サイドに大型のブロッカーを置いていたが、センターに大型ブロッカーを置くことによってあらゆる位置からの攻撃に対応できるようになった。

このように大型でブロック力のあるチームが上位を占める中、そのブロックを打ち破るために日本チームがセッターとアタッカーとの距離に変化を持たせた「B、C、Dクイック」、そのクイックに絡ませた「移動コンビネーション攻撃」、また守備における「フライングレシーブ」といった戦術を開発した。

現在全世界で行われている戦術の原型がこの時期に生まれたといえる。これらの戦術が出現したことにより、さらに「高さ」や「スピード」が要求されるようになった。

(2) 1968年メキシコオリンピック(総会)におけるルール改正

- ①「ネットの両端、サイドマーカー外20cmの所にアンテナを取り付ける」
②「コート外障害物までの距離は、上空で12.5m、サイドライン外は5m、エンドライン外は8mとする」

特に技術や戦術に影響を及ぼすようなルール改正はなく、審判の判定が容易になったことなどが挙げられる。

(3) 1972年ミュンヘンオリンピック(総会)におけるルール改正

- ①「プレーヤーの片足又は両足が相手コートに触れても、進

入した片足又は両足の一部が、センターラインに触れるかあるいは上空にある場合、反則とはならない。」

ゲームの中断を少なくするための目的で行われ、安全の面で多少の危険が予想されたが、特に問題はなく戦術に影響を及ぼすこともなかった。

ルール改正とは関連はないが、ポーランドがバックアタックをコンビネーション攻撃に組み入れるという新戦術を用い、モントリオールオリンピックで優勝を飾った。

(4) 1976年モントリオールオリンピック（総会）におけるルール改正

- ①「チームは相手方にボールを返す前、ブロックの際の接触を除いて3回プレーすることが許される」
- ②「両サイド・マーカークの外側に接して2本の柔軟なアンテナを、両者の距離が9mとなるようにネットを取り付ける。」
- ③「スリーボールシステム」の採用

③のスリーボールシステムは時間短縮を目的としたもので、それは直接時間短縮に結びついた。

また②の両サイドのマーカークについては攻撃の幅を制限するものだったが、さほど戦術に影響を及ぼすものではなかった。

しかし①のブロック後にさらに3回プレーが出来るというルール改正については、今までサーブレシーブからでしかみられなかったコンビネーション攻撃が、お互いのラリー中でもみられるようになった。さらにブロックの目的も直接得点するためのものに加えて、相手のスパイクを弱めて味方に有利なボールを送るための手段としても使われるようになった。

よって速攻や時間差攻撃がさらに重要視され、より高度なコンビネーション攻撃が見られるようになった。

(5) 1980年モスクワオリンピック（総会）におけるルール改正

ルール改正なし

(6) 1984年ロサンゼルスオリンピック（総会）におけるルール改正

- ①「第1球目のアンダーハンドプレーに対するダブルコンタクト（ドリブル）の廃止」
- ②「サーブスのブロック禁止」

①のアンダーハンドプレーでのドリブル廃止についてみると、改正後スパイクやサーブの決定率の低下がみられ、ラ

リーが続く回数が増えるようになった。日本のリーグ戦（現Vリーグ）においてもこのルール改正後から現在に至るまでジャンピングサーブ以外でのサーブ賞受賞者は出なくなった。

②のサーブスのブロック禁止については、より軌道の低く、スピードのあるジャンピングサーブや相手の前衛を狙うサーブの出現が増えた。

これらのルール改正についてはゲーム中のラリーがより長く続くことを目的としたものであったこともあり、新しい戦術の開発に影響を与えるものではなかった。

ただしルール改正とは関係ないが、ロサンゼルスオリンピックで優勝したアメリカが「リードブロックシステム」と「2人サーブレシーブシステム」という新しい戦術を開発した。

「リードブロックシステム」は現在も多少のアレンジはあるものの、世界各国で主流な戦術として用いられているもので、ブロッカーがそれぞれのゾーンにいて肘を肩より高い位置に置いて構え、ボールがセットアップされた後にジャンプをするというもので、相手アタッカーの動きに迷わされることなく、対応できるという戦術である。

また「2人サーブレシーブシステム」についてはどのローテーションにおいても常に同じ2人のプレーヤーがサーブレシーブを行うというもので、サーブレシーブが苦手なプレーヤーを外して攻撃に専念させて、より返球率を高めるという戦術であった。ただサーブレシーブを担当する2人のプレーヤー（主にレフトプレーヤー）の守備範囲は広くなり、特にオールラウンドな技術が要求された。

そしてこのシステムによりプレーヤーのポジション別に分業化が進み、攻撃戦術の中でコンビネーションとしてのバックアタックの出現率が高まるようになった。

その後は特に新しい技術や戦術はみられなくなり、バレーボールそのものが洗練化されていくようになったといえる。

ルール改正についても時間短縮を目的として、第5セットのみラリーポイントシステムが導入された以外は、1992年のバルセロナオリンピックでの総会まで大きな改正はみられなかった。

(7) 1994年アテネ世界選手権（総会）におけるルール改正

- ①「サーブゾーンがこれまでの3m幅から9m（エンドラインの長さいっぱい）に変更される」
- ②「膝より下部にボールが触れると反則であったものが、足のつま先やかかとでも、身体のどの部分でもプレーができるようになる」
- ③「チームにおける第1回球目でのダブルコンタクト（ドリブル）の廃止」

まずこれまでは国際競技規則は、オリンピックの年に開催される総会で改正されてきたので4年間に変更されることはなかったが、世界選手権の年に開催される総会においても変

更されることになり、2年周期でルールの見直しが行われるようになった。

①のサービスゾーンについてはあらゆる角度からサーブが飛んでくるようになったが、同時に③の第1球目のドリブル廃止により打球の弱いサーブはオーバーハンドで処理できるようになったため、さほどサーブレシーブが乱れることはなかったが、レフトサイドから打たれる（特にサウスポー）ジャンピングサーブについてはかなりの威力を発揮した。

また②の全身どの部分でもプレーが可能になったことについては、1つの技術として意図的に足を使ったものはみられなかったが、偶発的に足に当たったり手では届かないボールの処理などに用いられた。このことからレシーブの構えが今までは少しでも低くなるようにしていたものから、やや高めに構えるように変化してきた。

また指導の現場においてバレーボールは手で扱うスポーツであるので、ボールを足で蹴るといった行為はほぼ禁止されていた流れがあったが、そういったものがなくなってきたといえる。

これらのルール改正は、反則の緩和によって少しでもラリーが続く目的で行われたが、特にオーバーハンドのドリブル廃止などは、世界的にみても日本のように身体能力の劣るチームはミスの少なさで対抗していたが、正確な形でなくともとにかくボールを上げてしまえば反則にはならないということになったので、やはりヨーロッパを中心とした大型チームに有利なものであったといえる。

(8) 1998年日本世界選手権（総会）におけるルール改正

- ①「それぞれのチームは、12人の競技者のリストの中から専門的な守備のためのリベロ・プレーヤーを1人登録することができる。」
- ②「使用されるボールについて、国際バレーボール連盟承認のカラーボールの使用と内気圧を緩和する（ $0.425\text{kg}/\text{cm}^2$ から $0.325\text{kg}/\text{cm}^2$ ）」
- ③「全セット25点のラリーポイントシステムで行う。ただし第5セットのみ15点で行う」

まず②のカラーボールと内気圧については、メディアを意識して見た目をよくするためのものであったが、現場レベルではメーカーによって色が違うことで初めは戸惑いがあったものの、ボールの回転が見やすいなどのメリットもあった。内気圧については特に男子においてスパイクやサーブ（ジャンピング）の威力を弱めてラリーが続くことを目的としたが、あまり効果はなかったといえる。

①のリベロ制度については、これによってバレーボールのポジション別による専門性や分業化がより促進されたものになった。

身長が低い選手に対してもチャンスを与える目的で取り入れられ、正規の選手交代とは関係なくコートに入ることがで

きるプレーヤーであるが、フロントゾーンでのオーバーハンドでのトスやサーブ、スパイク（バックアタック含む）をすることはできず、レシーブ専門のプレーヤーであった。

主にセンタープレーヤーと交代するチームが多いが、今までは大型で攻撃力はあるが後衛でのレシーブが苦手なスターティングメンバーとしては試合には出場できなかったプレーヤーが、リベロプレーヤーと常に交代することで各チームの大型化がより進み、ますます大型チーム有利な状況になっていった。

そしてバレーボールのゲームの様相を大きく変えたといえるのが③の全セットラリーポイント制である。これもメディアを強く意識して試合の時間短縮を図り、1試合あたりの試合時間がある程度計算立てられることを目的としたもので、これによりTV放送などで途中で打ち切り（あるいは編集することで試合の結果が途中で分かってしまうなど）ということがあり起こらなくなった。

サイドアウト制の時は長い試合で3時間以上ということがあったが、ラリーポイント制ではどんなに長い試合でも2時間から2時間半で終わるようになった。

現場の対応としてはどのプレーにおいても（たとえばサーブのミス）点数が入るので、ミスを少なく押さえることと、早くゲームが終わってしまうのでスタートから力を出せるようにしておかないと後半に追いつけなくなってしまうことになり、最初からサイドのエースアタッカーで勝負をしてくるため、センターのクイックの打数（割合）は減り、より強力なエースアタッカーを持っているチームが有利になったといえる。

(9) 2000年シドニーオリンピック（総会）におけるルール改正

- ①「サービスされたボールがネットに触れ、相手側に入った場合、そのプレーは続行される」

いわゆるサーブのネットインというもので、ラリーポイント制採用に伴い少しでもサーブの入る確率を高めようとして行われたものである。さほど高い確率で出現はしないが、ネットに当たって相手コートの下に入るようなサーブは確実にポイントになるため、よりスリリングになったといえる。

3. 結論及び今後の予想

以上のように技術や戦術、ゲームの様相に大きな影響を及ぼしたと思われるルール改正について振り返っていったが、その目的については大きく2つに分けることができる。

まずは上記のルール改正の歴史（6）までは、例えばコンビネーション攻撃といった攻撃戦術が進みすぎた時に攻守のバランスを取る目的で、両サイドにアンテナを立てて攻撃の幅を狭くしたり、ブロックのオーバーネットを認めたりと

いったもので、新しいルールに対してそれに対応する戦術が生まれるというものであった。

それに対して新しい技術や戦術があまり出なくなった(7)の1994年以降は、コートやボールの色をカラフルにするとか、ラリーポイント制による時間短縮などバレーボールの競技そのものの関心を高めてもらうために新しいルールができるというものに変わってきたといえる。

今後の予想としては、まず最近の流れからすると反則を緩和して少しでもラリーを続けさせようという流れがあるので、バックアタックの威力を弱めるためにアタックラインの位置を現状のセンターラインから3mより後ろに下げることが考えられる。

また6人制のバレーボールは9人制から独立して現在に至っているわけだが、サービスエリアを9mにしたり、ラリーポイントシステム、1本目のドリブルの廃止といったものは、6人制が9人制化しているものであり、その流れからするとローテーションを廃止して完全ポジション固定制といったものもできるかもしれない。

このように近年の目まぐるしく変わるルールに対して、現場のレベルではいかに早く順応していくかが課題となっていくだろう。

参考文献

- (1) 池田久造：「バレーボール ルールの変遷とその背景」日本文化出版 1985年
- (2) 小鹿野友平ほか：「バレーボールの学習指導」不味堂出版 1987年
- (3) カーチ・キライ：「カーチ・キライのパーフェクト・クリニック」日本文化出版 1987年
- (4) 清川勝行：「バレーボールにおける攻撃技術・戦術の歴史的発展と推移」日本バレーボール協会科学研究委員会研究報告集第IV巻 1988年
- (5) 砂田孝士ほか：「6人制バレーボールのルールと審判法」大修館書店 2000年度版
- (6) 西川順之助：「バレーボール世界の技術」講談社 1978年
- (7) 松平康隆ほか：「バレーボールの戦術」講談社 1972年
- (8) 山本章雄：「バレーボールにおける守備技術・戦術の歴史的発展と推移」日本バレーボール協会科学研究委員会研究報告集第IV巻 1988年
- (9) 吉田康伸ほか：「バレーボールにおけるフロントとバックの攻撃パターンについての研究②」法政大学体育研究センター紀要第17号 1999年
- (10) :「バレーボール国際競技規則(6人制)」日本バレーボール協会 1979年度版
- (11) :「バレーボール国際競技規則(6人制)」日本バレーボール協会 1985年度版